

Q

水際の明るさの違いにより、  
魚類の生息状況には変化が見られる  
のでしょうか？



遮光され、照度が下がっている様子



# A

明るすぎず、また暗すぎない水際を  
魚類は好む傾向にあります。

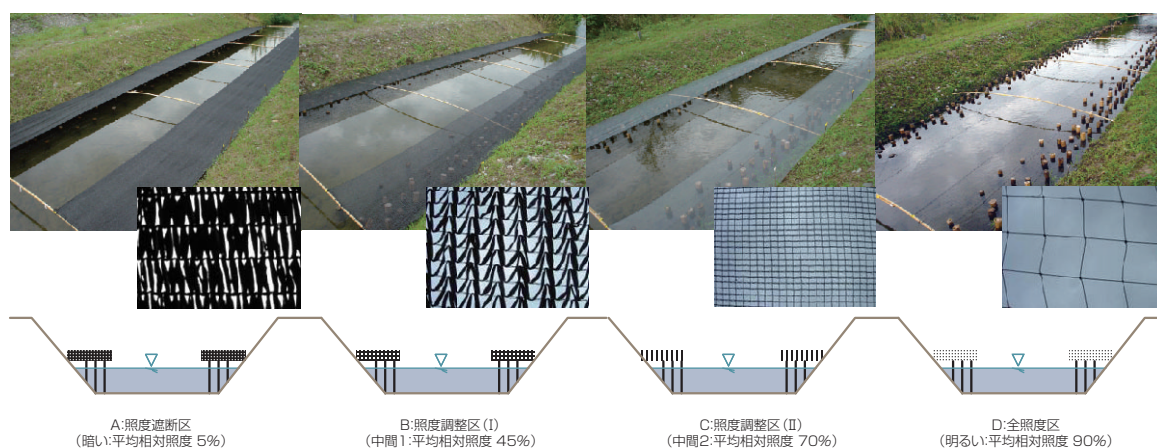
## ● 目的

代替工作物による水際植生の機能回復の可能性については、成魚を対象にしたこれまでの調査で、水際植生の水中カバー効果（流速の低減、休息場所・産卵気質の提供、捕食圧の低減）の機能を木杭（間伐材）により再現できる可能性があることが明らかになっています。

本年度は、成魚を対象に水際植生の水上カバー効果（捕食圧の低減、日陰の創出）の機能を遮光シートで覆うことにより再現し、成魚の応答を調査しました。

## ● 調査方法

実験河川Aの水際に木杭と遮光性の異なる4種の遮光シート（A（暗い）～D（明るい））を設置し、魚類の生息量について調査しました。調査期間は8月～9月。



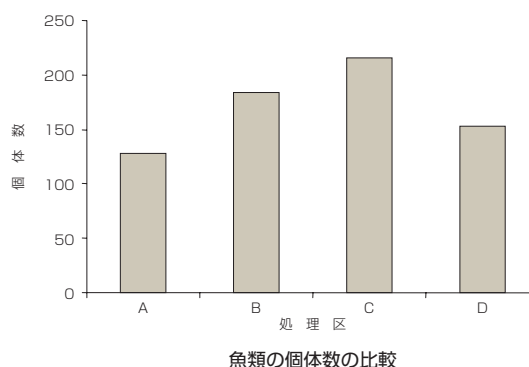
処理区の設定イメージ図

## ● 結果と考察

その結果、実際の明るさの違いにより魚類の生息状況に差が現れ、明るすぎず、暗すぎない状態（中間的な相対照度）を魚類は好む傾向があることが明らかになりました。

処理区C（中間2）の個体数が最も多く、BからAへと次第に暗くなるに従い個体数も減り、また最も明るいDはCより少ないという状況でした。

こうしたことから、代替工作物により水際植生の水上カバー効果を復元するためには、遮光して単に暗くするだけでなく、明るさの調節という点が重要であることが明らかになりました。



魚類の個体数の比較

担当：新田 良彦・河口 洋一・齊木 雅邦